

37  
449



始



エト3R-24

37-449



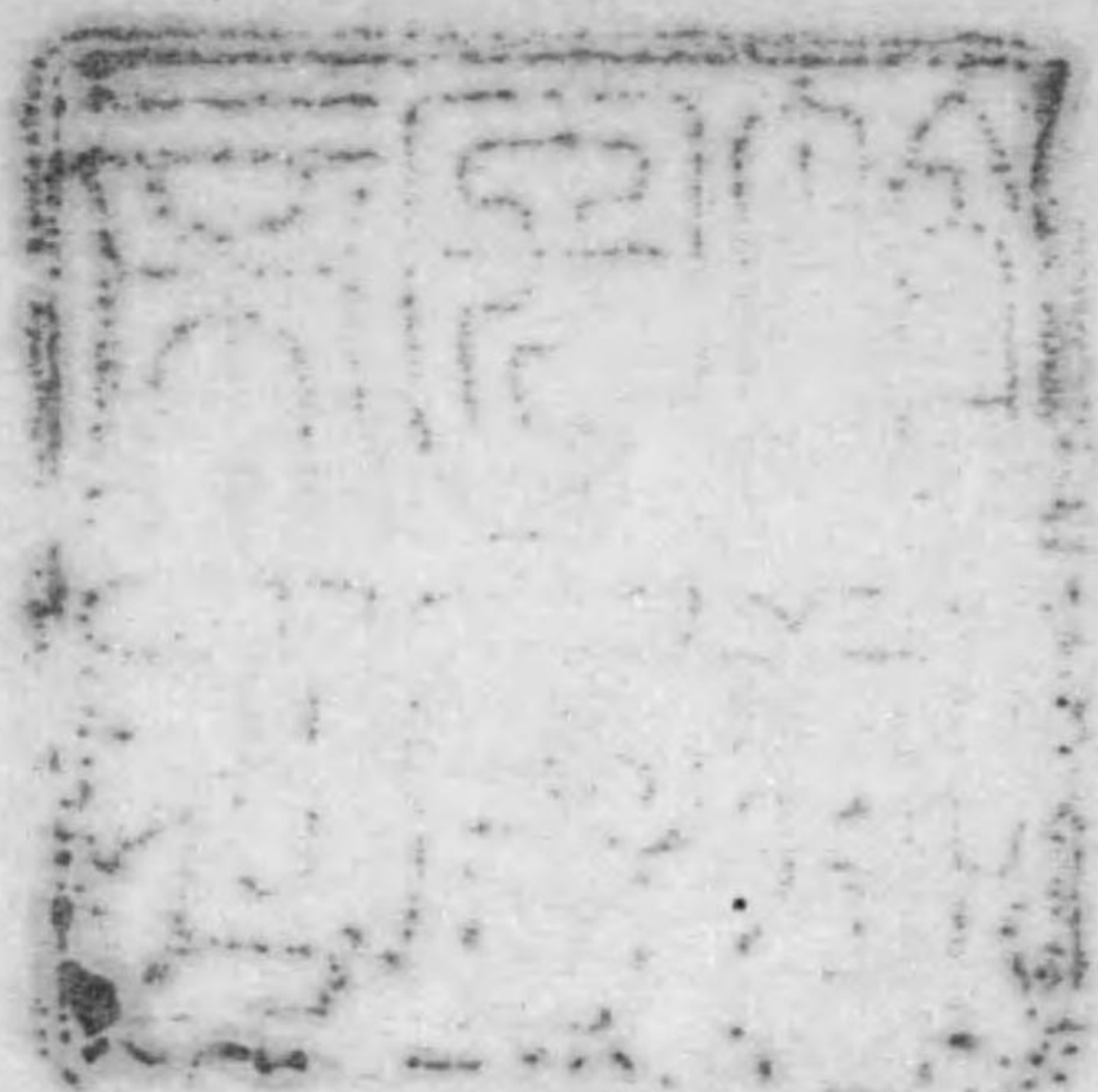
公  
案  
四  
百  
則

大正  
4. 7. 28  
内交

## 凡例

- 一 今茲に附録として蒐むるの數百則は古今師家室中に在て未だ卷頭に出でたるを聞かず、學者大に之を苦しむ
- 一 予多年之を彙集して一編の冊子となし斯界の便宜を斗らんとして今日漸く成る
- 一 記載する處のものは多くは著者が參得せし十餘人の室内より喫し來りしものなり
- 一 碧巖集及び禪林句集の偈頌數則をも加へたり、





# 公案四百則

瞎驢庵主編



●無字五十五則

一 趙州云く無！

二 證據を出して見よ

三 生死透脱は何麼ぢや

田舎 生も死も透り脱ける

- 四 焼けば灰となり埋めば土となる
- 五 無と云はずして何と云ふぞ
- 六 有と無と判然區別せよ
- 七 有と無と相去る事眞の多少ぞ
- 八 無は何處まで透る
- 九 無字の手渡し
- 一〇 無字を賽の目に切て一汁五菜の馳走献立をしてみよ

- 二 無字を手軽く使つてみよ
- 三 無字を絹振ひ細末にして手渡してみよ

- 三 無字の高さを云てみよ
- 四 無字の姿は什麼ぢや
- 五 同裏の姿は什麼ぢや
- 六 無字を七歩周行させてみよ
- 七 無字の姿に對する寸法は何尺何寸

あるか云ふてみよ

六 無字の先照後用を此品にてやてつ

みよ

元 無字を三歳の子供にでも解るやう

に言ひ分けて見よ

二 無字を見て何にする

三 無字を見たら無底の椀子に無心の

心を盛り持ち來れ

三 無字を脱者自在に使つてみよ

三 無字を日用の上うへに用ゆる賣物品うりものひんを

以て有と無むと言いひ分わてみよ

二 之これに世語せごを着つけてみよ

二 同本語どうほんごを着つけよ

六 大惠だいゑ曰いはく趙州せうしゅうの無字むじ祇麼しゑに舉こせよ

**略解** 祇麼しゑに舉こす(まさしく云て來い)

七 古人こじん曰いはく此この僧そう未いまだ佛性ぶつじやうを問とはず

三

趙州無と答へざる時如何  
頌に曰く、趙州の狗子無佛性、萬  
疊の青山古鏡に藏る、赤脚の波斯  
太唐に入る、八臂の那吒正令を行  
ず

略解 萬疊青山 (重なりくつた青山) 赤脚

波斯 (素足の達磨) 正令 (號令なり)

元

中峯和尚八箇の無字は什麼ぢや

三

無門大師二十箇の無字は什麼ぢや  
頌に曰く、趙州の露刃劍、寒霜光  
り焰焰、纒に如何と擬着せば、身

を分つて兩段となす

三

自分一人無字を觀ては已に聲聞、  
一切衆生は如何んが度せん

三

無字の根元は什麼ぢや

三

無字に語を着けよ



三 其の語の字眼を指し將ち來れ  
三 無字に提偈を着けてみよ

略解 提偈 (自分の權式を以て着語する)

三 無字の業識性は什麼ぢや

三 業識性を平和で云てみよ

三 業識性境界の働きをしてみよ

三 業識性を二分してみよ

三 趙州曰く有!

三 有を平和で云てみよ

三 百二十歳の趙州を生捕にして來い

三 方圓長短の無字は什麼ぢや

三 犬に業識性のあるあり

三 趙州眞の相見

三 五識より六識に移る處は什麼ぢや

三 業識性を什麼片付ける

三 趙州は何を指しても

五 無字を轉轆々地阿轆々地に云てみ

よ

五 無字の形は何ぞや

五 無字を日用事に使つてみよ

五 師曰く知て故に犯す

五 いやく夫れでは濟まさんぞ佛祖

の意に叶はん

五 無字に對する總語をつけよ

● 隻手六十則

一 隻手無聲の妙音は何ぞ聞いた

二 隻手を聞たら證據を出せ

三 隻手の生死透脱は何ぞや

四 隻手を打ち切てしまつたら何ぞや

や

五 左右の手共に縛られて後に出身の

一路は什麼ぢや

六 兩足を踏み締められて隻手斷臂出

身の一路は什麼ぢや

七 隻手音聲何處まで聞える

八 一切の音聲をとめてみよ

九 三十三天の夜又蒙羅堂の鳴らぬ鐘

の音聲をとめてみよ

一〇 一切の水聲山川谿谷の聲を什麼と

める

二 音聲を一句にとめてみよ

三 天で聞たか地で聞たか

三 隻手音聲東京で聞たか倫敦で聞た

か

四 隻手音聲内で聞たか外で聞たか

五 隻手音聲裏で聞たか表で聞たか

六 其裏表を今日上の事で云てみよ

七 自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の姿<sup>すがた</sup>にて裏<sup>うら</sup>表<sup>おもて</sup>折<sup>せ</sup>半<sup>はん</sup>に云<sup>い</sup>てみよ  
 六 其<sup>そ</sup>の裏<sup>うら</sup>と表<sup>おもて</sup>に語<sup>こと</sup>を折<sup>せ</sup>半<sup>はん</sup>して着<sup>つ</sup>けよ  
 元 隻<sup>せき</sup>手<sup>しゆ</sup>を聞<sup>き</sup>たら私<sup>わし</sup>にも聞<sup>き</sup>かせ  
 二〇 隻<sup>せき</sup>手<sup>しゆ</sup>の色<sup>いろ</sup>は什<sup>じ</sup>麼<sup>う</sup>ぢや  
 二 隻<sup>せき</sup>手<sup>しゆ</sup>が一<sup>ひと</sup>握<sup>にぎ</sup>りの灰<sup>はい</sup>となつたら其<sup>そ</sup>の  
 三 灰<sup>はい</sup>を什<sup>じ</sup>麼<sup>う</sup>する  
 三 兩<sup>りやう</sup>手<sup>て</sup>を展<sup>あつ</sup>開<sup>ひら</sup>げて隻<sup>せき</sup>手<sup>しゆ</sup>音<sup>おん</sup>聲<sup>せう</sup>は什<sup>じ</sup>麼<sup>う</sup>聞<sup>き</sup>  
 た

三 富<sup>ふ</sup>士<sup>じ</sup>山<sup>さん</sup>頂<sup>ちやう</sup>上<sup>せう</sup>の隻<sup>せき</sup>手<sup>しゆ</sup>は什<sup>じ</sup>麼<sup>う</sup>ぢや  
 四 之<sup>こ</sup>に世<sup>せ</sup>語<sup>ご</sup>をつけよ  
 五 其<sup>そ</sup>の隻<sup>せき</sup>手<sup>しゆ</sup>をねじ折<sup>お</sup>つて將<sup>もつ</sup>て來<sup>こ</sup>い  
 六 隻<sup>せき</sup>手<sup>しゆ</sup>の一<sup>ひと</sup>番<sup>ばん</sup>親<sup>した</sup>しきものを云<sup>い</sup>てみよ  
 七 隻<sup>せき</sup>手<sup>しゆ</sup>を聞<sup>き</sup>て畢<sup>ひつ</sup>竟<sup>きやう</sup>何<sup>なに</sup>にする  
 八 手<sup>て</sup>を出<sup>だ</sup>して何<sup>なに</sup>故<sup>ゆゑ</sup>に之<sup>これ</sup>を手<sup>て</sup>といふ  
 元 故<sup>こ</sup>人<sup>じん</sup>は往<sup>かう</sup>々<sup>く</sup>一<sup>ひと</sup>隻<sup>せき</sup>手<sup>しゆ</sup>を以<sup>もつ</sup>て衆<sup>しゆ</sup>生<sup>せう</sup>濟<sup>さい</sup>度<sup>ど</sup>  
 せしが其<sup>そ</sup>の妙<sup>めう</sup>處<sup>じよ</sup>を云<sup>い</sup>てみよ

三 人天衆前の隻手音聲は什麼聞たか  
三 隻手を團粉にして一口に呑んでみ

よ

三 其の呑んだ團粉を吐き出してみよ

三 隻手の當體は什麼ぢや

三 隻手の姿を云ひ分けてみよ

三 隻手無聲の妙音とは什麼なものぞ  
能く云ひ分けてみよ

三 隻手眞の黒星を云てみよ  
三 隻手を聞て生死の生綱は什麼斷た  
三 隻手生死の生綱を即今什麼斷つた

速に道へ

三 隻手の當體は什麼ぢや

三 隻手を聞たら秘密で聞かせ

三 青樓に登た時の隻手は什麼ぢや

三 明暗の隻手は什麼ぢや

四

隻手せきしゆの機用きゆうは什麼なにぢや

四

過去くわこ現在げんざい未來みらいの隻手せきしゆは什麼なにぢや

五

隻手せきしゆの上うへに於おて三千さんぜん諸佛しよぶつを出だして

みよ

四

隻手せきしゆの形かたちは什麼なにぢや

五

淀河よどがはの流ながれを隻手せきしゆでとめてみよ

四

隻手せきしゆ音聲おんせい何處どこまで透とうる

四

二祖にそ斷臂だんひの隻手せきしゆは什麼なにぢや

五〇

隻手せきしゆ眞しんの境界きやうがいは什麼なにぢや

五

隻手せきしゆ總體そうたいに語ごを着つけよ

五

隻手せきしゆに提偈ていげをおけ

五

隻手せきしゆに世語せごをつけよ

五

隻手せきしゆの根元こんもとは什麼なにぢや

五

其そのの隻手せきしゆの根元こんもとは什麼なにぢや速すみやかに道い

へ速すみやかに道い

五

隻手せきしゆ總體そうたいにつけた語ごの中なかに字眼じがんあ

吾 指し將ち來れ  
隻手の上うへに於おて富士山ふじさんを出だしてみ

よ

五 隻手せきしゆ兩重りやうじゆうの難關なんくわんとは什麼なにぢや

五 隻手せきしゆ最後さいごの牢關ろうくわん

六 いや〜夫れでは佛祖ぶつその意いに叶かなは  
んぞ

●機關百三十一則

一 虚空こくうを荒繩あらしなで縛しばつて持もつて來こい

二 虚空こくうを二つ三つ持もつて來こい

三 虚空こくうと首引くびひきをしてみよ

四 虚空こくうを大笑おほはわらひさせてみよ

五 虚空こくうに低頭くわいとうさせてみよ

六 虚空こくう親爺おやじは幾歲いくつになるぞ

七 虚空を跳轉させてみよ

八 虚空を丸めて持て来い

九 今食時だから虚空を菜にして持て

来い

一〇 虚空を最も細末にして馳走せよ

二 此の廣い世界に雨が幾粒降てゐる

か

三 庭の木の葉は何枚あるか數へてみ

よ

三 天の星の數は幾箇あるか

四 此の廣世界の眞砂の數は幾何ある

か

五 四十九曲り細山道を直ぐに通らに

や一分たゝぬ

六 師家の掌中で四十九曲りを通してみ

よ



一七 一切衆生悉く佛性あり鴉何に依て三四  
か佛頂を汚す

一八 之に世語を着けてみよ

一九 一切衆生は肉骨を藏す龜何に依て

二〇 か骨肉を隠す

二〇 富士山を燈心で結んで線香で擔いで持て來い

二一 富士山を七足半歩ませしてみよ

二三 京都の愛宕山を取り除けて富士山

を代りにおけ

二三 淺草の觀音の釣鐘を什麼してつり

上げるか

二三 天へは何處から昇るか云ふてみよ

二三 千里遠方の燈火を消してみよ

二四 燒火箸の中から水を出してみよ

二五 此の抓楊枝の中へ這入てみよ

三 此の烟管の中を出入りしてみよ  
六 燈心を以て庭の踏石を曳て來い  
六 庭の飛石の重量は何程あるか  
元 大黒柱の中へ這入てみよ  
三 辻の石地藏を此處へ連れて來い  
三 床の軸物に書てある達磨を歩ませ  
てみよ  
三 此の徳利の中へ出入りしてみよ

三 此の犬の年は幾歳になるか  
四 頭の髪は何本あるか  
五 走る自動車をとめてみよ  
六 沖に走る帆掛け舟をとめてみよ  
七 川向ふの喧嘩をとめてみよ  
八 此の茶碗の中で行導してみよ  
九 庭前の花は生か死か  
四〇 此の扇子の中へ這入てみよ

四 此の給仕盆を濟度してみよ

四 渡し舟をとめてみよ

四 善く射る者は的に當らずと云ふが

四 然らば下手な者は當るか

四 之に世語をつけてみよ

四 床の軸物を手をかけずに外してみよ

四 西方十萬億土の阿彌陀如來は本年

四 幾歳になる

四 軟な物を持って堅い物を切る事が

四 出来るか

四 天竺の祇園精舎の徳兵衛が徳利提

げて酒買ひに行くのを此處で見え

るか

四 天の高さは何程あるか

四 地の厚さは什麼ぢや

五 口を開かず大念佛を唱へてみよ  
 五 子供等が蟹を捕へ足を折り今や殺  
 さんとする時什麼濟度するか  
 三 暗夜に賊と善人と來る作麼生か分  
 ち得ん  
 吾 風何の色をか成す  
 五 之に世語をつけよ  
 五 之に語を着けよ

五 雨何れより來る  
 五 之に世語をつけよ  
 五 之に語を着けよ  
 六 石の櫃へ入れられて五祖大師が番  
 をしてゐるのを什麼して出るか  
 六 即今師家を入れて什麼出すことが  
 出來るか  
 三 然らば汝を入れて乃公が番をして

あるから速に出てみよ

三 此の扇子は天から降たか地から湧

いたか

四 向ふ通るは清十郎でないか笠が能

く似た管笠が、笠が能く似て清十

郎であればお伊勢参りは皆清十郎

清十郎とは什麼な男ぢや

五 之に世語をつけてみよ

六 夜着の袖口から東京市中を見て來

い

七 家鴨の卵の中で茶臼を廻してみよ

八 疊の間に化物が大の字なりに寢

てゐるか床の軸物を什麼して取り

にゆくか

九 之に語を着けてみよ

十 隠元薬罐の中から東寺の塔を出て

みよ

三 印籠の二重目から富士山を出して

三

若し途中に於て難産の婦人に出合

ひ何卒お助けを願ひたいと云はれ

た時は什麼して助けるか

三

天台の石橋何處より着手するか

三

即今如何んが着手し見よ

三

文殊獅子に乗り普賢象王に乘る釋

迦如來は何に乗り給ふか

三

即今轉じて語を着けよ

三

此石心外にあるか心内にあるか

三

今一本橋を渡らんとするに前面よ

り狼來り後より虎噛みつかんとす

下には大蛇口を開いて待つ大修行

底の人如何んが渡り得ん

ハ 過去現在未來の三千諸佛を一々此

處に出現させてみよ

ヒ 大修行底の人ならば口を覆ふて一

句を道てみよ

ヒ 床の墨畫の山水對幅同じ仕立の同

筆であるが其善惡を見分けてみよ

ヒ 床に掛けてある大梅の軸物如何な

る香がするか

ヒ 燈燈の火を明るくせよ

ヒ 新出來の佛を何處に安置したら可

いか云ふて見よ

ヒ 富士山頂の穴の水を飲み干してみ

よ

ヒ 釋尊の舍利を分身させてみよ

ヒ 即今此處で分身させてみよ

ヒ 此の竹篋の中へ出入してみよ

九〇 生きた達磨の舍利を分身させてみ

九一 大小の河水悉く東海に歸するとい

ふが隅田川の水は何處に流歸する

か

九二 之に世語をつけてみよ

九三 右の袂の中から東京銀座通りへ行

て豆腐三丁と酒一舛買つてこい

九四 八大龍王の中で雨を降らす龍王は

何の龍王であるか

九五 死んで何處へ行く

九六 春日の局が幽靈を濟度する時は茶

碗の中に水を一杯入れて自ら簪を

抜て茶碗の上に横たへて濟度せり

と大修行底の人如何んが濟度せん

九七 汝は何處より生れ來て何處に歸る



ぞ  
六 這箇四人昇ぎ那箇か是れ唯一人ある

略解 這箇（是はこれ）那箇（どうして）

九 一圓相を出得してみよ

一〇 無寒暑の處を云ふてみよ

一一 高麗國泉涌寺に安置せる地藏尊身の丈け三丈八尺あり如何んが捕縛

し來らん

一〇三 線香の中に隠れてみよ

一〇四 途中にて師家が美味い物を呉れと

云はれたら何を出して呈るや

一〇五 死んで焼いて後は什麼なるか

死了焼了して何れの處に向つてか

相見せん

一〇六 佛舍利と祖師の舍利と見分けて撰

り出してみよ

一〇七 三千の諸佛は即今如何なる説法をしてをるか

一〇八 大黒柱は如何なる説法をなしつゝあるや

一〇九 獅子領下の金鈴子何人か奪ひ得たる

一一〇 ぶんぶく茶釜の中より七福神を出

してみよ

一一一 蟻の卵の中で大石白を廻してみよ

一一二 大石白を廻すに(蟻卵中)少し離れた働きをしてみよ

一一三 糞壺の中の光明は如何

一一四 奈良の大佛を此處に背負ふて來い

一一五 紫胡の門札に曰く上は首を取り中腰を取り下は足を取る擬議せば喪

身失命すとあり大修行底の者一句  
作麼生

二六 一人の小僧瓦を大石の上に載せて

一句作麼生といふ時何と答へん

二七 汝の鼻吼中の髪は何本ある

二八 天竺の蒙羅堂のついで撞かれぬ

鐘の音を聞て來い

二九 生壁の上へ座つてみよ

三〇 夢中の西來意は何ぞや

三一 マツチの箱から軍艦を出してみよ

三二 印籠の中から伊吹山を出してみよ

三三 印籠の中から越中富山を出してみ

よ

三四 印籠の二重目から富士山を出して

みよ

三五 然らば三重目からは何ぞや

二六 汝こんじに烈れつ火くわの餞せん別べつせん速すみやかに受うけ取とれ  
 二七 大だい燈とう國こく師しは雲うん門もん大だい師しの再さい來らいといふ  
 二八 夫それまで何ど處こに什ど麼うしてゐたか  
 二九 佛ぶつ界かいか魔ま界かいか速すみやかに道いへく  
 三〇 達だつ磨まの舍しゃ利りを拾ひろつて來こい  
 三一 然しからば什ど麼う片かた付づけるか(其その舍しゃ利りを)  
 三二 左ひだりの五ご神じん通つうを一いち々く見み分わけて來こい  
 三三 天てん眼げん通つう天てん耳に通つう神じん變へん自じ在ざい通つう他た神しん通つう宿しゆく

命めい通つう

●法身の部二十七則

- 一 空手にして鋤頭を把り（善惠大師頌）
- 二 歩行にして水牛に騎る
- 三 人橋上より過ぐれば
- 四 橋は流れて水は流れず
- 五 橋は流れて水は流れずといふ處を  
平和で云ひ且つ働きを以てしてみ

- よ
  - 六 然らば此の掌上に於て橋は流れて  
水は流れずをやつてみよ
  - 七 五臺山上雲飯を蒸し（洞山禪師偈）
  - 八 古佛堂前狗天に尿す
  - 九 刹竿頭上に飽子を煎る
  - 一〇 三箇の猢猻夜錢を簞す
- 略解 尿（小便すること） 飽子煎（雜煮餅を

煎る) 錢筋 (錢を筋でふるふのだ) 吾

二 徐ろに行て踏断す流水の聲

三 縦に觀て寫し出す飛禽の跡

略解 踏断 (ふみきる) 飛禽 (飛ぶ鳥)

三 荷葉團々として鏡よりも圓なり

四 之に本語を着けよ

五 之に裏語をつけよ

六 菱角尖々として錐よりも尖なり

七 之に本語を着けよ

八 之に裏語をつけよ

九 風柳絮を吹て毛毬走り

一〇 之に本語を着けよ

一一 之に裏語をつけよ

一二 雨梨花を打てば蛺蝶飛ぶ

一三 之に本語を着けよ

一四 之に裏語をつけよ

略解 荷葉 (蓮の葉) 菱角 (菱の角) 錐 (錐)  
柳絮 (柳の枝) 梨花 (梨の花)

- 二五 昨夜泥牛戦つて海に入り未だ今朝  
に至るまで消息を得ず  
二六 之に世語をつけよ  
二七 之に本語をつけよ

● 言詮の部六十則

- 一 空を敲けば響きあり木を打てば聲  
なし  
二 南に向つて北斗を見る  
三 茶店の婆子あり白隠に問ふて曰く  
尿坑裡に光明を放つや作麼生  
四 之に語を着けよ

五 政女あり白隠禪師に問ふて曰く夢  
 中に一人あり若し西來意を問はゞ  
 如何んが答へ得ん（機關と重複す）  
 六 之に世語をつけよ  
 七 之に本語を着けよ  
 八 了徹居士あり惠昌尼問ふて曰く尼  
 老ひたり自ら起つ能はず請ふ手を  
 下さずして尼を起せよ

九 拶して曰く此の老漢に手を下さず  
 して起しめよ  
 一〇 桃首座あり葦津に問ふて曰く大力  
 の鬼あり汝が臂を捉へて大熱地獄  
 に投づる時作麼生  
 二 三八九を明らめずんば境に對して  
 諸思多し  
 三 拶して曰く三八九を平話で云てみ



よ

三 拶して曰く三八九を境界にて云て

みよ

四 拶して曰く三八九を子供にでも解

るやりに働きを以てせよ

五 之に語を着けよ

六 君子は財を愛す之を取るに道あり

七 僧香林に問ふ如何なるか是れ納僧

下の事、林曰く臘月の火山を焼く

八 微風幽松を吹く近く聴けば聲愈好

し

九 六月松風を買はゞ人間恐らくは價

なからむ

一〇 懷州の牛禾を喫すれば益州の馬腹

張る

三 拶して曰く即今此の老僧の腹は少

しも張れて無いが於三や於七天權平

や太郎作は什麼ふくれてゐるか

三 之に語を着けてみよ

三 蝦跳れども斗を出でず

三 木鶏子夜に鳴き芻狗天明に吠ゆ

三 萬境の荒田誰をか主と作す

三 之に世語をつけよ

三 之に本語をつけよ

三 鐵圍山を掇轉す

略解 鐵の山を拂ひ轉がして見よ

元 上杉謙信軍刀眞向に振り上げ武田

信玄を打んとして曰く如何なるか

是れ劍双上の事信玄騒がず軍佩を

以て靜かに受け止めながら香爐上

一點の雪と答ふ大修行底の人作麼

生か道はん速に道へ

三 朝あしたに西さい天てんに往ゆき暮くれに唐とう土どに歸かへる

三 安あん禪ぜんは必かならずしも山さん水すいを須もちひず心しん頭とう

を滅めつ却ぎやくすれば火ひも自みづから涼すずし

三 泗し州しゅうの大たい聖せい何なにに依よるか楊よう州しゅうに出しゅつ現げん

す

三 之これに語ごを着つけよ

三 古こ德とく曰いはく白びやく蓮れん々々くく此この意い作そ麼も生さん

三 紫し胡こ門もん下かに狗いぬあり大だい人にんの相そうを露あはは

す

三 萬ばん象ぞう此し中ちゆう獨どく露ろ身しんとは什しち麼もぞ

三 拶おつして曰いはく是これ萬ばん象ぞうを拂はらふか萬ばん象ぞう

を拂はらはざるか

三 萬ばん里り寸すん草そう無むき處ところに如い何かんが此この牛うし

を牧ぼくする人ひとあるや作そ麼も生さんか道いへ看み

ん

三

僧徳山そうとくさんに問ふて曰く深山裡しんさんりに佛法ぶつぽう  
ありや又無しや山曰く有り僧曰く  
如何いかんが深山裡しんさんりの佛法ぶつぽう、山曰く石頭せきとう  
曰く大底だいぢは大小底せうたいていは小

四〇

之これに世語せごをつけよ

四一

之これに本語ほんごをつけよ

四二

毛頭もうとう巨海こかいを呑み芥中かいちゆうに須彌しゆみを納いる

四三

此この腰却こしかつて是心これしんの五則ごそく如何いかん

四四

拶さつして曰く我れ此この氣海きかい丹田たんてん腰却ようきやく  
足心そくしん總そうに是れ我が唯心ゆいしんの淨土じやうど淨土じやうど

四五

拶さつして曰く我れ此この氣海きかい丹田たんてん腰却ようきやく  
是心これしん總そうに是れ我が本分ほんぶんの家郷かきやう家郷かきやう

四六

拶さつして曰く我が此この氣海きかい丹田たんてん腰却ようきやく  
足心そくしん總そうに是れ我が己心こしんの彌陀みだ彌陀みだ

何なんの行相ぎやうさうをかなす  
拶さつして曰いはく我が此この氣海きかい丹田たんでん腰却ようきやく

是ぜ心總しんさうに是これ南無阿彌陀佛なんむあみだぶつ是これ何なん  
の説法せっぽうをかなす

咒くわい 古徳曰こくとくいはく哲てつ

拶さつして曰いはく其その哲てつを平話へいわで云いてみ  
よ

吾ご 古徳曰こくとくいはく休去きゆうしよ歇去せつしよ吟湫ぎんしゆう々去くしよ古廟裡こべうり

香爐去かうろ一條白蓮去せうのくれん一念萬念去ねんばんねん以上さるい  
六句一々見分け來れ

五 之これに世語せごをつけよ

五 之これに本語ほんごをつけよ

五 蚊子鐵牛ぶんしてつぎうを嚙む

五 雲は嶺頭れいとうに到いたつて閑不徹かんふてつ水は淵下みづ

五 に流ながれて大忙生たいまうせい

五 圖畫とくわ往昔そんかみ洞庭ていとうを愛あいす波心はしん七十二峯はう

青あをし、如い今まに高こう臥くわして前ぜん事じを想おもへば、  
添そへ得えたり盧ろ公こうが赤せき壁へきに倚よりしこ  
とを

突

弄

無む業ごう一いつ生せう莫ばく妄もう想ぞう、瑞ずい岩がん只ただ喚よぶ主人しゅじん公こう、  
空くう山さん白はく日じつ蘿ら窓そうの下もと、松しょう聲せい聽きき止やんで  
午ご睡すい濃ななり

毛

暮ぼ雲うんの歸かへつて未いまだ合あせざるに對たいす  
るに堪たへたり遠ゑん山さん限かぎりなき碧へき層そう々

弄

一ひと曲きょく兩りやう曲きょく人ひとの會あする無むし、雨あめ過すぎて  
夜や塘とう秋しゅう水すい深ふかし

弄

意い氣きある時とき意い氣きを添そふ  
風ふう流りゅうならざる處ところ也なり風ふう流りゅう

弄

念

●道歌の部十二則

- 一 千の利休曰く寒熱の地獄に通ふ茶  
柄杓も心無ければ苦しみなし茶  
道の人大に貴ぶと雖も心無くては  
本石に等し、大修行底の人下の句を  
改め來れ
- 二 燈火の消えて何處にゆくやらむ闇

- きは元の住家なりけりと古歌にあ  
れど下の句未だ穩ならず改め將ち  
來れ
- 三 千代能が戴く桶の底ぬけて水溜ら  
ねば月も宿らず下の句を改め將ち  
來れ

附記 千代能は北條顯時の女足利貞氏に嫁し  
夫死して後無外と號し平安景愛寺を建

立して如大禪尼といふ此歌は夢窓國師  
に參したる投機の歌なり

四 拶して曰く底無き桶に水がだぶだぶ

五 檀林皇后の歌に唐土の山のあなた  
にたつ雲は此處でたく火の烟りな  
りけり

六 芭蕉翁曰く古池や蛙飛び込む水の

音

七 伊勢の海千尋の底の一つ石袖ぬら  
さず取るよしもがな、さあ取てみ

八 拶して曰く其の石の目方は何程あ

九 拶して曰く其石に銘は何と切てあ  
る



一 闇やみの夜よに啼なかぬ鴉からすの聲こゑ聞きけば生うれ  
 ぬさきの父ちちぞ戀こひしきとは作そ麼も生さん  
 二 聞きくならく地じ獄ごくの底そこに沈しづみては刹せつ  
 那なも須しゆ陀だも替からざりけり此この意いを  
 道いひ將もち來きたれ

略解 刹せつ那な (短時間) 須しゆ陀だ (修道に入りたる位のこと)

三 唱となふれば吾われも佛ほとけもなかりけり三世

諸佛しよぶつの聲こゑばかりして

●神道の部十五則

- 一 國常立尊未だ此の世に出現めされぬ以前如何んが汝父母未生以前本來の面目
- 二 摺して曰く國常立の尊は何處より出現めされしぞ
- 三 摺して曰く國常立の尊は何れの處

- 四 より此の世界を生み出し給ひしや神史の奥義に曰く所謂天地は身の大なる者、身は天地の小なるものとあり大天地と小天地能く言ひ分けてみよ
- 五 天神七代地神五代並に八百萬の神々を一々此處に出現させ申すことが出來得るか

六 太神宮には大の字の下に一點あり  
大修行底の人此の一點を打ち替へ  
みよ

七 神道にていふ六根清淨の祓といふ  
大修行底の人如何んが六根清淨の  
祓ひ

八 拶して曰く眼に諸の不淨を見て心  
に諸々の不淨を見ず

九 拶して曰く耳に諸の不淨を聞て心  
に諸の不淨を見ず

一〇 拶して曰く鼻に諸の不淨を嗅で心  
に諸の不淨を嗅がず

二 拶して曰く舌に諸の不淨を味ふて  
心に諸の不淨を味はず

三 拶して曰く身に諸の不淨を觸れて  
心は諸の不淨に觸れず

三 拶して曰く意に諸の不浄を思ふて  
心に諸の不浄を思はず

四 汝は大修行底の人さらば一問せん  
佛前に向つて合掌し又神前に向つ  
ては柏手を打つが畢竟作麼生速に  
道へみむ

五 拶して曰く平話で云てみよ

●經文の部三十七則

- 一 心經の當體とは作麼生
- 二 經文の始めには皆な如是我門と出  
てゐるは作麼生
- 三 事は這裡にあり理は何處にかある
- 四 色即ち是空空即ち是色
- 五 拶して曰く之を經意で云つてみよ

七 煩腦即菩提とは作麼生

八 之に世語をつけよ

九 之に本語をつけよ

一〇 釋迦如來は娑婆往來八千度とあり

汝は是れ幾度せしか

二 阿彌陀經に唯心の淨土己身の彌陀

とあり作麼生

三 阿彌陀佛年齒眞の多少ぞ

三 法華經に法報應化四智如來とあり

如何んが四佛智見汝等速に和歌又

は世語にて道ひ將ち來れ

三 涅槃經の中に惡闡提の衆生何に囚

てか佛性無きとあり忠國師は有と

説けり又肇法師石を並べて説法す

れば頑石盡く點頭すと此意作麼生

四 阿耨多羅三藐三菩提は此經より出

三 づ如何んが此經

五 拶して曰く其れは何れより出づるや

六 楞嚴經に一念心を發して源に歸すれば十方空空盡く消隕すとあり消隕の二字未た穩かならず改め將ち來れ

七 普門品に觀音三十二應身を説きあ

六 即今汝の三十二應身は作麼生  
普門品に應に婦女身を以て得度する者は即ち婦女身を現じて説法すとあり作麼生

五 同じく童男童女を以て得度すべきものには童男童女身を以て説法すべしとあり作麼生

三 涅槃像中に一の妙處あり指し將ち

來れ

三 拶して曰く涅槃像中何に依てか猫の居らざる

三 之に語を着けよ

三 金剛經に應に住する處無うして而

も其の心を生ずとあり作麼生

二 之に世語をつけよ

二 之に本語をつけよ

三 同じく過古心も不可得現在心も不

可得未來心も不可得とあり大修行

底の人何れの心を以て此餅を食は

ん

七 同じく若し人の爲めに輕賤せられ

ん此の人先世の罪業にて應に惡道

に墮すべきに今世の人に輕賤せら

るゝを以ての故に先世の罪業即ち

爲めに消滅して當に阿耨多羅三藐

三菩提を得べしとあり作麼生

元 之に本語を着けよ

元 同様に是法は平等にして高下ある

こと無しとあり作麼生

三 之に世語をつけよ

三 之に本語をつけよ

三 同様に世界に非るもの是を名づけ

て世界といふ

三 之に世語をつけよ

三 之に本語をつけよ

三 同様に若し色を以て我を見音聲を

以て我を求めば是の人邪道を行ず

如來を見奉ること能はずとは作麼

生

三 一切有爲の法は夢幻泡影の如く露



の如く亦電の如し應に是の如きの  
 觀をなすべし  
 若し人三世一切の佛を知らんと欲  
 しなば應に法界性を觀ずべし一切  
 は唯心造なりと施餓鬼にあり作麼  
 生

公案四百則終り

大正四年七月廿四日印刷  
 大正四年七月廿四日發行

(定價十五錢)

不許複製

校訂者 晴 驢 庵 主  
 編輯兼 發行 者 立 平 衡  
 印刷者 藤 本 兼 吉

發行所

東京市神田區  
 駿河臺袋町一

光融館

電話本局二九九九番  
 振替東京二三一三番

(刷印社會式株印新日)

光融館藏版書目

天桂禪師提唱  
釋宗演禪師講述  
勝峯大徹禪師講述  
釋宗演禪師講述  
南條文雄博士講述  
若生國榮師講述  
大內青巒居士講述

碧巖錄講義  
無門關講義  
臨濟錄講義  
金剛經講義  
文梵金剛經講義  
寒山詩講義  
圓覺經講義

郵定稅價 十參六圓  
郵定稅價 八十五錢  
郵定稅價 八十七錢  
郵定稅價 八十錢  
郵定稅價 四十二錢  
郵定稅價 八九十錢  
郵定稅價 八十五錢  
郵定稅價 八十五錢



織田得能師講述  
島地大等師講述  
前田慧雲博士講述  
姬宮大圓、釋清潭  
藤谷還山師講述  
龜谷天尊師講述  
織田得能師講述  
釋宗演禪師述  
釋宗演禪師述

天台四教儀講義  
十不二門論講義  
天台西谷名目講義  
大乘止觀頌講義  
華嚴學講義  
金獅子章講義  
八宗綱要講義  
坐禪和讚講義  
禪海一瀾講義

郵定價 八十錢  
郵定價 六十五錢  
郵定價 四十錢  
郵定價 二十錢  
郵定價 四十五錢  
郵定價 四十五錢  
郵定價 四十五錢  
郵定價 四十五錢  
郵定價 四十五錢  
近刊

釋宗演禪師述  
釋宗演禪師述  
忽滑谷快天師述  
若生國榮師述  
森大狂居士參訂  
禪學編輯局參訂  
釋悟庵師編纂  
山田孝道師校註  
森大狂居士參訂

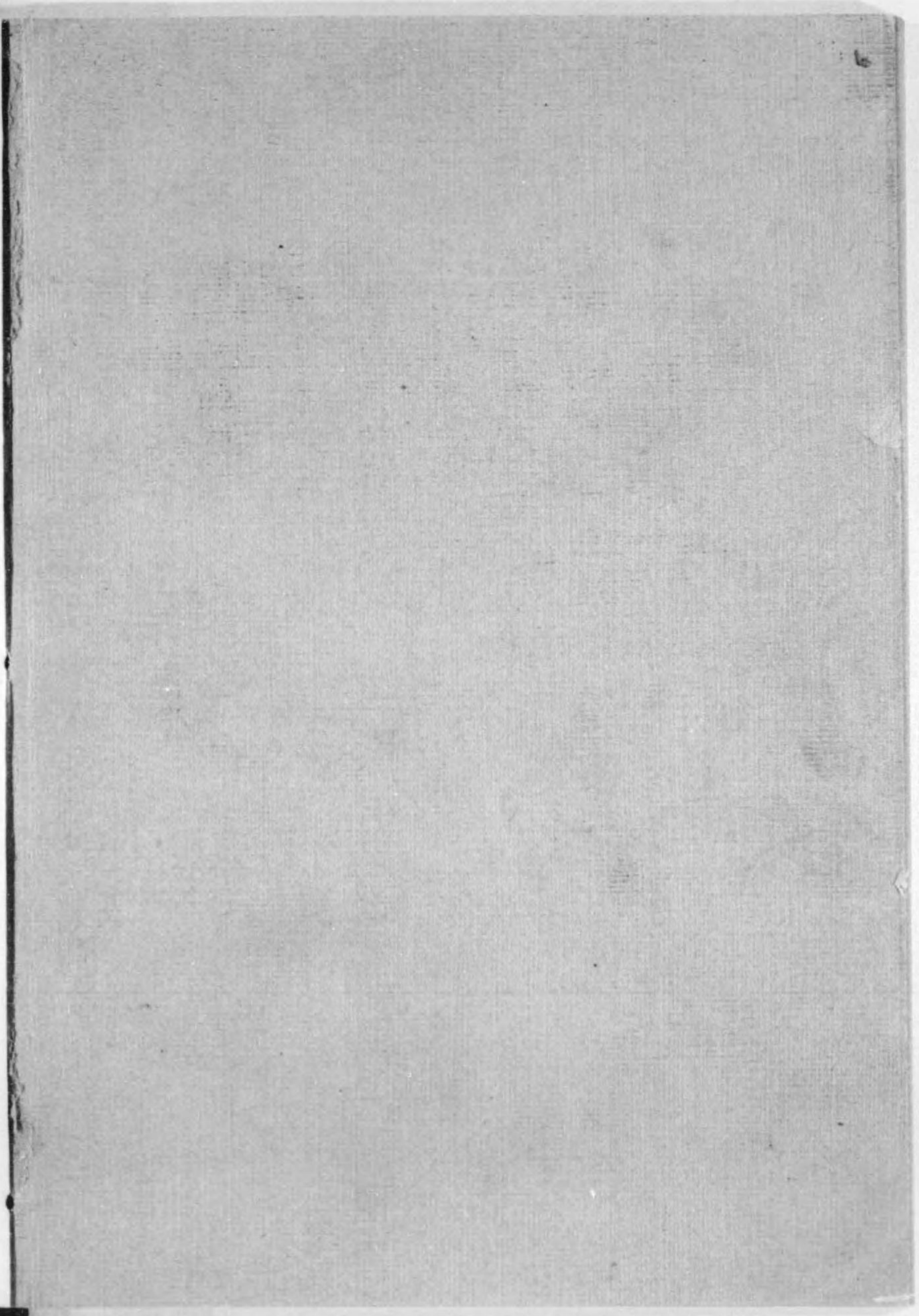
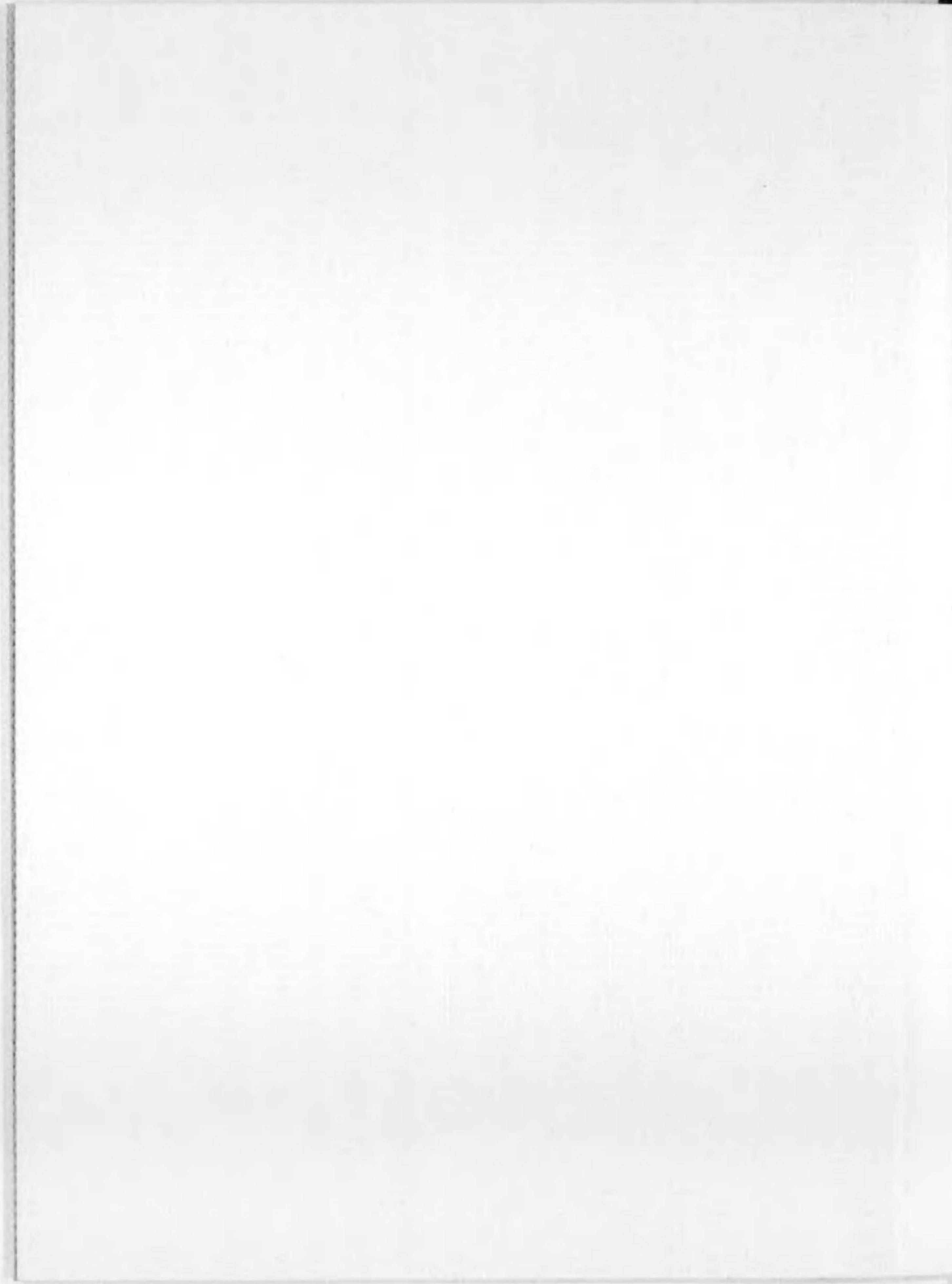
十牛圖講話  
佛教家庭講話  
禪家龜鑑講話  
父母恩重經講話  
一休和尚全集  
白隱和尚全集  
坦山和尚全集  
禪門法語集  
續禪門法語集

郵定價 四十錢  
郵定價 六十錢  
郵定價 七十五錢  
郵定價 二十二錢  
郵定價 八十五錢  
郵定價 八十五錢  
郵定價 八十五錢  
郵定價 八十五錢  
郵定價 壹圓參拾錢  
郵定價 壹圓七十錢  
郵定價 二圓五十錢  
點校註



IT3R-24

原 僧 運 師 著	釋 宗 演 禪 師 著	棲 梧 寶 獄 師 評 釋	勝 峯 大 徹 禪 師 著	山 田 孝 道 師 著	村 上 專 精 博 士 著	釋 雲 照 律 師 著	織 田 得 能 師 著	織 田 得 能 師 著
禪學早わかり	靜坐のすゝめ	評釋 靜坐のすゝめ	禪と長壽法	佛教のすゝめ	佛教概論	佛教通論	佛教大意	佛教金言集
郵定 稅價	郵定 稅價	郵定 稅價	郵定 稅價	郵定 稅價	郵定 稅價	郵定 稅價	郵定 稅價	郵定 稅價
六十四 錢	二五 錢	四二 錢	八五 錢	六五 錢	八七 錢	一圓 二十 錢	四二 錢	六三 十五 錢



終

終